

マニジピン塩酸塩錠10mg「YD」

生物学的同等性資料

溶出比較試験

「後発医薬品の生物学的同等性試験ガイドライン（平成 9 年 12 月 22 日付医薬審第 487 号、平成 13 年 5 月 31 日付医薬審第 786 号）」

<試験方法>

装置 : 日本薬局方一般試験法溶出試験第 2 法（パドル法）

試験液量 : 900mL

温度 : $37 \pm 0.5^{\circ}\text{C}$

回転数 : 50 回転

試験液 : pH1.2 = 日本薬局方崩壊試験第 1 液

pH4.0 = 薄めた McIlvaine の緩衝液

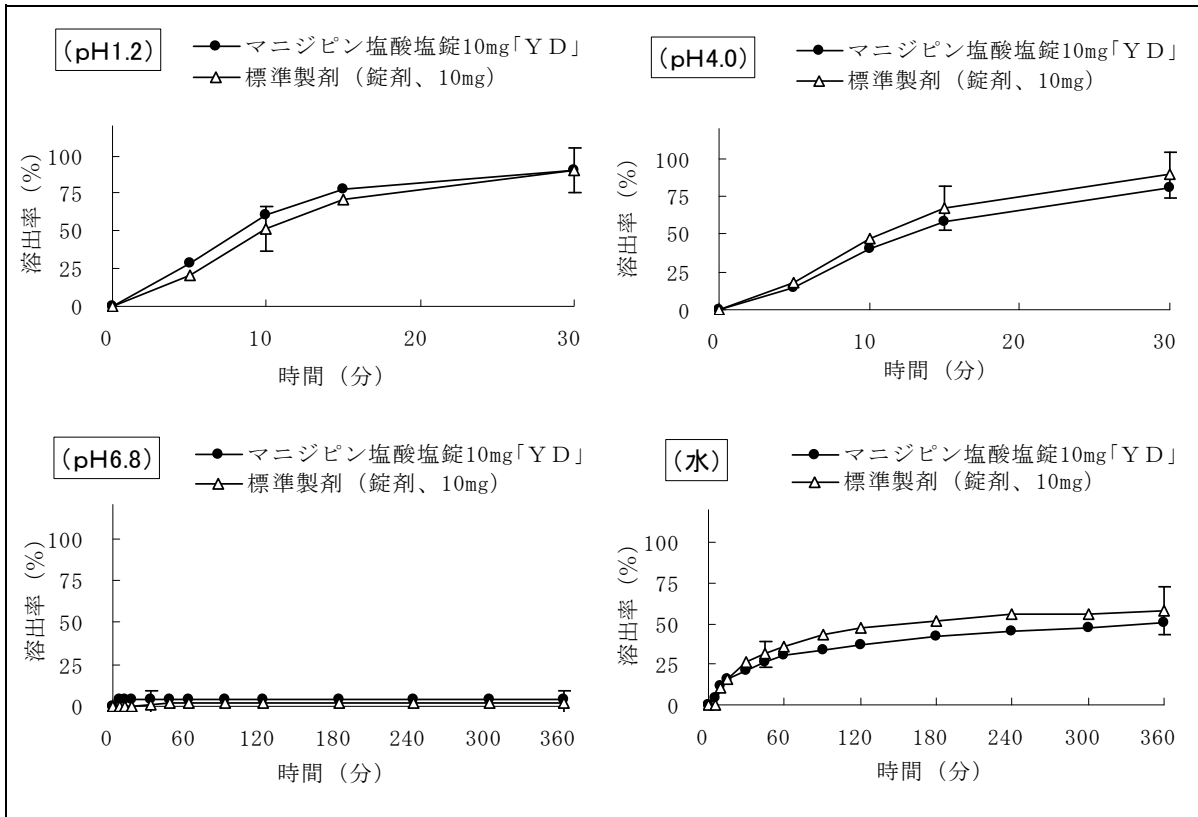
pH6.8 = 日本薬局方崩壊試験第 2 液

水 = 日本薬局方精製水

判定基準 : 【pH1.2、pH4.0】標準製剤が 15 分～30 分に平均 85%以上溶出する場合、標準製剤の平均溶出率が 60%及び 85%付近の適当な 2 時点において、試験製剤の平均溶出率は標準製剤の平均溶出率 $\pm 15\%$ の範囲にあるか、又は f_2 関数の値が 45 以上である。

【pH6.8、水】標準製剤が規定された試験時間内に 85%以上溶出しない場合、標準製剤が規定された試験時間における平均溶出率の 1/2 の平均溶出率を示す適当な時点、及び規定された試験時間において、試験製剤の平均溶出率は標準製剤の平均溶出率 $\pm 15\%$ （標準製剤の平均溶出率が 50%未満の場合 $\pm 8\%$ ）の範囲にあるか、又は f_2 関数の値が 50（標準製剤の平均溶出率が 50%未満の場合 55）以上である。

<試験結果>

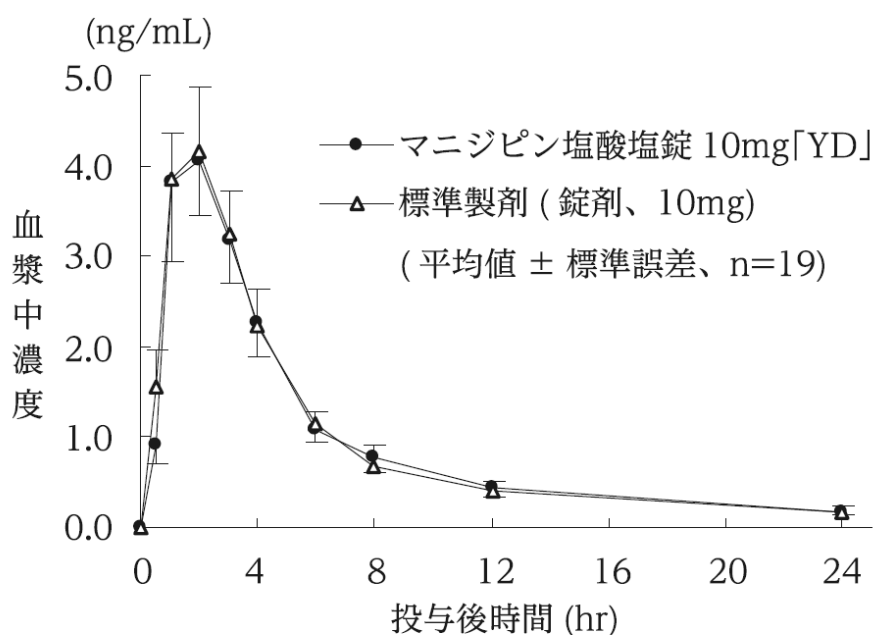


血中濃度比較試験

マニジピン塩酸塩錠 10mg「YD」と標準製剤をクロスオーバー法によりそれぞれ2錠（マニジピン塩酸塩として20mg）、健康成人男子19名に絶食単回経口投与して血漿中マニジピン濃度を測定した。得られた薬物動態パラメータ（AUC、Cmax）について統計解析を行った結果、両剤の生物学的同等性が確認された。

	判定パラメータ		参考パラメータ	
	AUC ₀₋₂₄ (ng・hr/mL)	Cmax (ng/mL)	Tmax (hr)	t _{1/2} (hr)
マニジピン塩酸塩錠10mg「YD」	23.1±14.7	5.13±3.46	1.7±0.7	5.6±1.9
標準製剤 (錠剤、10mg)	22.9±12.1	5.18±2.93	1.8±0.8	5.3±1.2

(平均値±標準偏差、n=19)



血漿中濃度並びにAUC、Cmax等のパラメータは、被験者の選択、体液の採取回数・時間等の試験条件によって異なる可能性がある。